

学生会議

通
信

No.32
68.12.6

東京教育大學
学生会議

大學當局の協議會による收拾策動粉碎！ 民青、全學協議會路線による斗争矮曲粉碎！

あらゆる改良主義、大學共同体論を一掃せよ！

教育大學の全ての學友諸君々

學校當局の28回席の前に我々はいまだに態度を決めかねてゐる。それは彼等の改良主義的反收拾案にいくばくかの幻想をいだくことから起因していのうござりないか。

全ての斗う學友諸君々いゝさゝの改良幻想を排し明確に收拾策動を粉碎せよ。

曰共リ民青系諸君、修正主義者すがいの「全學協議會」なるものに幻想をもつことは止めたまえ。ましさカオナルゴサナシカリダム」を持ちだし、自らはその汚名からまぬがれると錯覚し、學友に対し罵責任を言辞をふりまくのはやめたまえ。諸君達はすぐに修正主義者に転落していけるのである。

學友諸君、我々は當局の收拾案を全面的に粉碎しなければならぬと同時に、曰共リ民青の「學國民主化」論を一層緻密化するものとしての「全學協議會」に全面的に對決し、その路線を粉碎していくことを抜きにして、眞理移転阻止斗争山東の勝利はあり得ないと考える。

眞理移転粉碎斗争において、文書の「應該事」の歴史役割

眞理移転粉碎斗争において、文書の「應該事」を要因として大學當局の移転推進派が根本的に動搖し、へや已ニト左次々と失い、其の隙間から丁綱争収持し左表賛紙にした移転情事終へ左は之教換然から右付費解説会がイニシテイド左にカリツツある段階といふことができる。我々はこの局面の中で我々の斗いの出発点であつた「調查費計上攝過」でMTPを解散しというスローガンが、すでに當局を強制したものであり、ほど裏切られていふことを、

ます前提的に把握しなければならぬ。にもかかわらず、搬國が返上に、解散が審議束結にと自己拡張さに技術的乗り切りを行うとしている。さらに

眞理移転粉碎斗争において、文書の「應該事」の歴史役割

土地確保決定自新搬國はいゝさゝ不向に付し、協議會に委託することによつて眞理の反動性十べてを確保し、協議會をもつて管理運営を改良する代價をもつて乗り切ろうとしている。我々は「協議會」が一つは六、一つの搬國に向かってまづしぐらに進んでいたる輿力斗争を協議主義的制度内の斗争におしこめるものであり、一つはせもそも事態の原因は學内の運営が諸階層の意見が反映しないなくなりしまつたことであると一切階級的矛盾を陰陥れ大學共同体の幻想がオロヨリをぶりまき、眞理移転へその兩編の対体と性格に對決することをさせらるものであることを正確に把握しなければならない。

我々はこれらに協議會と收拾案が移転反対分りし眞理、即ちリヤラル派によつて提出されていることには注意し守ければならない。眞理提案、一四日回答までが眞理の斗争論は案であるとすれば、二八日回答は眞理公内アドラーによる眞理の自らの學系と一緒に実現しつつ斗争を收持するものである。

之眞理公内アドラーによる眞理の特殊利害を反撲しにものであり、それを乘り越えて階級的利害を志向す我々の斗争を压殺しよろとするものである。

文多數派のそれとは六、一つまで要求することは結果しつつある眞理と共に中間的部份を分解させ、また國家権力の介入を招くことになる。協議會で眞理で出来るか關係が任るし、ストのような犠牲なくして出来るといふものであり、文多數派のそれとは六、一つの決定は正しげとなる立場ノ最終決定は眞理の特殊利害が眞理公内アドラーに決定する」といふものであるが、

彼等が多数派として、さらには権限を算括して支配体制となるならば、緻密に計算された彈圧を斗争にかけてくるだろう。彼等の市民的性格は一時的な国家権力、資本の政策に反抗しようとども、自らの手を汚して移転政策を遂行するだろう。

我々はどんな進歩的立場をとるうとも、既成の秩序を改良し、それに割り込むことにさやうさやうとしている輩、支配機構を破壊しつくすことなく、推進反動派から支配権をつねうことによくせする輩を全面的に粉砕しなければならない。今、我々につきつけられたこの選択は①六・一〇決定は「民主化された大學運営の中で」正しく結着がつけられると夢想して、全學集会・協議会・スト收穫の道を進み移転を許すのか、②六・一〇自紙撤回は我々自身の革命的團結にかかることを再確認し、實効斗争の尊的強化をもって、移転停止までバリケードを守りぬくのかの二つの道の選択としてある。

賛成移転派研斗争において

日共リ民青の「全學協議会・路線の説明

昨年來の自然発生的な大競争の爆發の中で、大競争主義的に「戦斗化」した日共リ民青は、確かに表面きて「スト終結」を語ってはいない。しかし農教授会多数派リベラル派が指頭しつつあるのを見る時、民青の提起している「學内各局へヒリわけ教授」との統一戦線・全學協議会が必然的にこのような傾向と愈着し、スト終結に向けた一大勢力を形成するであろう。教授公の階級的總質を欠落させた「學問の自由を守れ」の立場、「民主的」な立場が大學上層部の权力政治の前に全く無力であることはこの間の移転問題の審議の全過程が我々に示している教訓である。

嫡波斗争における彼等の「協議会路線」は「民主的」教育と一体化することによってストライキ斗争を圧殺し、斗争を改良主義的な方間に導き、自己の立場の利害を貢献させようとするものに他ならぬ。我々は移転推進派リ大学当局に一休みを与えるだけの「全學協議会」路線と断固として対決しつつ、大學当局に嫡波移転を許すのか否かが非妥協的な斗いを行ひなければならぬ。

日共リ民青の「全學協議会・路線の説明

大学由蟲の把え方

本来大學は學問研究と教育の府→ところが現在米日反動の政策の下で、學問の自由と大學の自若が広範に侵害され、これと対抗を許すのが大學当局の非民主的な運営である→大學問題の根本的解決を期するには学生、一般教職員の意向を無視してきた非民主的な管理運営方法を改める→→學内闘争の意見を反映させた管理運営の制度的保障として、全學協議会を設置し、教育研究にかかる重要な事項を協議する。

大學問題の把え方、「全學協議会」路線の誤り

我々がますますさりとせざかねばならないのは大學の本来の使命が學問、思想の自由をめぐむことだけでは決してありえないということである。學問研究の「自由」とか大學の「自若」とは、本来、専門知識のアルジョウ社会におけるその典型を示したのであり、それは資本制社会の經濟的政客的諸關係が必要としたものである。さて現在の「民主帝國主義」段階において、背後に進行する階級斗争、教育者と學生の階級的な斗争を一定に反映したアルジョウ的諸權利の別名にすぎない。またこの「ヒカラ」大学と「社風」というアルジョウ的な概念の対立図式を排し、「大學」内部の支配と被支配の關係を、現實の階級的政治經濟諸關係のなかから見抜かなければならぬ。彼等は「現在の大學が、軍國主義と獨占資本のための研究と個人づくりの場となりつつある」と云う。しかし大學は本来「中立的」なもののが独占資本の支配に組み入れられようとしているのではない。資本の歴史的な運動に規定され、学界下に「大學の自若」「學問の自由」という形態の形態を変えようとしているのであり、まさにそれが帝國主義的構造であり、後進帝國主義の特殊性の中にあ、に前戦の反動的帝國大學が、戦後階級斗争と敗戦帝國主義の政客的、経営的後退のなかで成主

化を展開していくにちがい、現在高度成長をとげ、世界資本主義の解説期に登場した日本の政治的経済的原因によつて変化をとげようとしているのである。

この、もとより大學“抗争”的正統的本質であり、

大學は内外的にもその支配形態を変化させで

いる。彼等のよらな幻想的な大學共同体と無

占資本の矛盾という把握をする、とはできたり。

我々はこのことから大學内部の矛盾と階級関係を資本の動向とその社会的階級關係の分析の分から見なければならぬ。我々は「大學当局や経営者の非民主的運営」を、「現象論的な「封建的關係の残滓」とや草むる「專制的ない「懲處」の問題に一面化する」ことはできない。大學当局者や経営者が「大學の發展」と「個別利害に立脚する限り、ますます國家権力と一体化し、自らの権限を強化しつつ我々に対する支配を深めざるをえないのだ。教育の研究利害とはアルジョワ的個別利害として學生との利害対立、さらには相互の対立を現象させ、しかもこれが階級的諸關係に複雑され、帝國主義の利害とのものと対立させ、再編がその対立の中で進行するのだ。その具体例へと頭攻計画を前にして起きた教官層の分裂と政治の浸透である。

我々は今や「大學問題を「解消する力がどこにあるか明かである。それは「管理運営」へ支配と読みの立場の教授と學生の「民學協議会」にあるのでない。教官は學生のアルジョワ的特殊利害の対立を調整することと、その対立を規定する階級的矛盾を解消する、とけでさす。まして「金學協議会」が其共同体の代表機關として帝國主義の政策と權力に対抗できるとは夢想だにできないことである。又「金學協議会」にあらゆるものでもない。制度とは帝國主義權力による保障されたもの以外のないものでもないからだ。まして、自身即ち「制度」の有効性を認めにどして、民主權力なる力を背景にした制度がいかなる階級的解決につながるか、どうか。「金學協議会」を操作として、我々が大學の管理運営体制（支配体制）に介入していくのは、まさに我々の左翼的な力を体制化させることにはほかならない。我々にひとつの解決の方とは、そのような社會主義的な力ではなく、大學の管理運営体制のものと打倒していく對抗的な力を体制外的に形成し、暴力斗争を實くことにある。

大學の帝國主義的専制を実力斗争をもつて阻止して行くのがが問題なのだ。いや、かかる階級的組織の力が左隣にて教育の帝國主義専制を阻止しきる力は、さうした。教授が全く階級的階層をしていく以上、革命的教育者との連帯は現実でない。

教育界

の對抗的運動が教育大に呼ばれ、「學國民主化」して當局、文部省に對して斗争をきたした文教授会がせの合法主義的、改良主義的限界ゆゑに、反動的、保守主義的意識感覚を醸成したことにして注目し、それが左隣時代には社會主義の運動を行つてゐる」と主張している。ことに御手の教授会入の参加だが我々は運動團体は既定しなりが、彼等が特殊利害の追求でしかなければ、そして対策を用意とは、我々の斗争に依拠しつつも、そのよう

な学内諸々の専門別教授会もしくは各大学共同本部等の協議会と、我々の斗争に依拠しつつも、そのようないふる、利害調整が可能であるとする大學共同本部等の協議会についても、移転についても、の運動に物質的基盤を置いたもので、帝國主義的ものが特殊利害の追求でしかなければ、そして対策を用意とは、我々の斗争に依拠しつつも、そのようないふる、利害調整が可能であるとする大學共同本部等の協議会についても、移転についても、の運動に物質的基盤を置いたもので、帝國主義的が特殊利害の追求でしかなければ、そして対策を用意とは、我々の斗争に依拠しつつも、そのようないふる、利害調整が可能であるとする大學共同本部等の協議会についても、移転についても、の運動に物質的基盤を置いたもので、帝國主義的

「金學協議会」路線は「民族民主革命」戦略に規定された誤りである

彼等の路線は結局は自らの民族民主二段階革命戦略に根柢された誤りであり、一切の大衆斗争を戦略化された民主主義的課題のワクにおしこめ、もつて帝國主義への妥協と現象的な延命主はかつて「いこう」とする政策の革命戰略そのものの必然的帰結なのである。政府は一方で「教育休能停止法」などを考慮しつつ、地方、文教制度調査会の「大學改革案」のどとき改良主義的「解決案」をも準備してくる。日共「民育の金學協議会路線が主観的にはどうであれ」このよるな「大學改革案」は結局、政府・文部省の干涉と結びついで大學当局の專制を強める「赤旗労」と同様に、そしてアルジョア、シマーナリズムが死に宣伝する學生の「参加」の問題への斗争のすりかえとタイ、アルブリチ「政府・アルジョアの新たな腐敗、干渉、介入に手をかすものでしかなり」

二ハ回答を拒否し、全学斗による 民主団交実現に向けて前进せよ！

至この學友諸君々 我々は既に民青系諸君の犯罪時を役割をバクロしてきた。一六〇日に突破した、そして苦しい斗争の連続であつた二の箭波移転阻止の斗争を眞の勝利に向けて押し進めることなどできるか、かは、我口かニハ回答をめぐる民青系諸君の束ね区紛糾し得るか否かにかかるここと云はつきりと胸の中に正にきこんでおかねばならぬに已さう。

學友諸君々 向駐は二つである。我々は二ハ回答一犯罪的ストライキを始末如を紛糾し、その巨大な物質化を阻止しなければならぬ。

それは、二ハ回答の拒否一評議会の「講歩」の無視一太衆から多く、民青系諸君の里學協議会路線との対決一一般的イテ不口ギー斗争一立場表明運動初の矮少な理解によつては、どうした二元的な立場によつては決して貫徹することはできない。

我々が獲得すべし標準、二ハ回答を媒介とした評議会一民青の里學集会一里學協議会路線による一定の妥協と取引きの成立と反里學斗ブロックの形成を統一して把え、かつ統一的に紛糾しそうといつ頗矣である。それを通じて里學斗全体を五と、た二ハ回答に対する日和見と如癌の更服に明解る展望と与え、里學斗そのものの革命的な再生を勝とり、民青の中間ヲ抱き込みにワサビと打ち二み、里學斗の外延的發展をも勝とつといつことである。

そうして方針がまさに二ハ回答拒否一里學斗による評議会大衆団交要求なのさ。最も子く評議会の策動と対決し、最もよく民青の矮曲と対決し、最もよく大衆団交一六一の敵回一箭波移転阻止の路線を貫徹し、最もよく大衆を結集し得るの口雌一二の方針である。

事ム届多數派へ構改派へ諸君は二ハ回答を更りかれつゝ、大衆団交に千条件をつけていくといつある。これは評議会への技術的な対応という側面にありこは、されなりに「正当性」と有していふと云ふが如しれないな、それ自身も理學部教授会の決定如何によつて全くの空想になる危険性が大である!! しかし如搖している大衆をどう組織していくのかといつある矣と欠落させている。民青系諸君に呼びかけ、要求項目を一致させるなどといつことは、全く形式民主主義的発想であり、かつ非現実的であり、マヌリバーである。そんなことよりも何故里學集会

が大衆的結集を得られなかつたのか、そして斗争委のリラ代への転化を終結すべきである。

革ベル派諸君は二六・二七の軍事的警戒北のショックから、弱な力が足りないが、うと、フランクマッカウに太衆団交要求から大衆団交路線に方針転換をもして。彼らは一回以後の里學斗の前途の急務を愈々批判に転化することにより、そこの問題は自己の責任と痛感をも、て終結しえず、既にこそ危機的状態としこ方針を提起をせず、自己にとつては

在因でしみない状況にナラグマチックに対応していけるだけなのだ。そして、それは身やみじめなことに至學斗内部において最も石翼的な方針による、こことは悲劇ならぬ喜劇であるタ

中學派諸君は二ハ拒否をう針化することの中に、

この重みを正しく把握しえてゐることを我々は歓迎する。日本戦時に「里學集会路線」という、あらかじめ里學斗が民青に敗北して地獄へ我々はそうしらるるに苦斗しているのではないかとしにおけるスローガンを今日目に提起し、その下に組織化を進める二方に付しては、我々は挺向を提起せし。それは我々が云う二ハ回答拒否一里學斗による大衆団交要求といつ方針の今日的意義を十分把握していなければならないか？

(統一的)

斗ラ学友諸君!!

今や我々の進むべき道は明きらかである。二ハ回答拒否一里學斗による大衆団交要求の方針の下、里學のリラスにおいて徹底した組織化を貫徹せよ!! 我々学生里學はその最後頭にたつて斗つであろう。

大學当局の協議会による收招案幼粉糰、民青の里學協議会路線による矮曲粉糰、あらゆる改良主義・大學共同体論を一掃せよ!! 二ハ回答を拒否し、全學斗による大衆団交実現に向けて前進せよ！

箭波移転実力阻止！

教育の帝日主義的再編粉糰！

先進的學友は學生公敵に結集せよ！